

# じいちゃんが教えてくれた 野球という「宝物」

## 初めてのグローブ

「たしか龍泉洞球場（岩泉町）だったと思います。銀次君を連れてスポーツ少年団の野球試合を見に行った帰りに、グローブを買ってあげました」と祖父の畠山保男さん（59・緑区）は懐かしそうにつぶやいた。

銀次君小学2年生。まだ見ぬ夢への始まりだった。当時、銀次君は久慈市宇部町で両親と暮らし、休みの日はよく保男さんのいる普代に来て過ごしていた。学生時代野球をしていた保男さんの影響で、銀次君は次第に野球に興味を持ち始める。小学2年生のときには、スポーツ少年団・北竜ジャイ

アンツ（久慈市宇部町）に入団し、野球を始めた。しかし、その後、両親が離婚。小学3年生のとき、保男さんと祖母、恵美子さん（55）との生活が始まった。

## 普代スポ少に入団

その年の春、普代スポーツ少年団に入団。5、6年時には保男さんが同少年団の監督になり指揮を執った。銀次君は保男さんの指導で、その才能を磨いていった。当時団長を務めた太田和弘さん（50・太田名部）は「スポ少の練習は学校の校庭でやっていましたが、打撃の鋭い銀次にはよく校舎のガラスを壊されました。どうかしなればと思います。何人かで浜で使う網を校舎に張った記憶があります」と苦笑いした。藤澤俊明さん（当時普代小学校長・現遠野北小学校長）は「彼はガラスを割るたびに謝りに来ていました。何回もです。そんな彼の誠実さを出します」と振り返っていた。

## プロへのあこがれ

これも保男さんの影響だろうか。銀次君は保男さんが以

前キャッチャーをしていたこともあり、キャッチャーというポジションを次第に練習するようになった。5年生のときにはマスクをかぶり試合に出場。キャッチャーとしての練習に汗を流す日々が続いた。6年生では、岩手県大会で念願の優勝。東北大会でも準優勝と活躍した。

このころから心の隅に「プロの野球選手になりたい」といった漠然とした夢が芽生えた。と彼は言う。そんな銀次君に保男さんは「プロになるなら、人と同じことをしていては駄目だ。それ以上の努力を常にしないとプロにはなれないぞ」と言った。この言葉をかみしめ、ひたすら練習に明け暮れる日々が続いた。そして、野球という宝物を探しに、普代中学校に進んだ。



祖父の保男さん（左）とスポ少の野球試合を見る銀次君（右）



普代スポ少のとき下閉伊の大会で入場行進をする銀次君（左から3番目）



写真提供／畠山保男さん（緑区）